

中世服飾における

ミ・パルティについて

菅 原 珠 子

十二世紀来服飾の上にあらわれた変化について、F. Boucher は、“一つはファンタジーのモードであり、他方は新しい社会の必要に対応するものである”と述べている。⁽¹⁾十三世紀から十四世紀にかけて、衣服はその形も材質や色調も次第に変化にとみ、新しい技法がとり入れられたり、贅沢で華やかなものになってゆく。それは中央集権化に伴い力を得て来た王を中心とする宮廷や、地方権力を握る領主に限らず、生産、商業の発達により経済力を有する商人等に拡がり、更にフランスからイギリスやドイツ、イタリア等々の各地に伝わってゆく。

当時のヨーロッパは、十三世紀の末から十五世紀の初めにかけて黒死病等伝染病の大流行による人口の減少、戦乱や略奪、内乱による土地の荒廃が各地にみられ、人々は一様に不安な生活を送っていた。それにも拘らず、“ヨーロッパの文化は枯れるどころか、むしろ文化的には漸進したといわれる。第一は富の地理的配分を変えたことで、それによって知的で美的な活動の中心地がつくられた。病気の流行や経済的無秩序のみられる一方では仕事が栄え、町が拡大した。第二に人口の減少は、却って富の集中、生活水準の上昇の傾向となり、芸術の保護と文化の伝播が行われた。その結果、上流階級の神秘裡にあった趣味や習慣が一般に喜ばれ、葡萄酒やリンネル製品や読書が普及し、贅沢への愛が弱まるどころか、烈しくさえた。第三に西洋文化の秩序の崩壊は、人々の生活を無秩序にはしたが、同時に解放感を与え、彼等自身が未踏の道を歩くことによって新しい人間であることを自覚した”⁽²⁾のであった。

ヨーロッパは以後に続く長い不況時代に入り始めた時で、貧富の差は烈しく、不安定な社会的背景のもとにあって、人々は遂にそれらに眼をつむり、現実の快楽に身を委ねた。貧しい農夫や羊飼いが中世初期以来の粗末な衣服をまとい続けている一方で、宮廷や地方の貴族・富裕な商人たちは新しいモードを追いかけ、より優雅で華麗な衣服をつくりあげている。長らく続いたコットやショースは急に色づき、いろいろの変り形が登場し、多彩な色調、見事な織物でつくられ、毛皮や刺繡や dagging といわれる鋸歯状縁飾、mi-parti や紋章などによってそのファンタジックな雰囲気を高めた。Paul Lacroix が、“当時の写本画の中に数々のミニアチュールをしらべると衣裳の優雅さは、用いられた色彩によって高められている⁽³⁾”と言っているように、そこでは特に色彩の果たす役割の大きさが感じさせられる。十四・十五世紀の服飾様式では、色彩の豊かさがたしかに目立った特色の一部をなしている。ここでいう色彩の豊かさとは、人によっていろいろの色調を用いている、ということよりも、一つの服装の中に、例えばコット (cotte) とショース (chausses) とマント (manteau) と夫々色を違えたり、あるいは、一枚の衣服の中で、ショースの左右の色をかえるとか、マントやコットの表面を紋章や幾何学的な分割の仕方によって色調を使いわけるとかというような手法を用いていることである。そしてこれらの手法の中に mi-parti といわれる使い方がある。mi-parti はあるいは parti-colour, écartelé ともいわれ、日本では片身替りといっているものに類似している。分割した部分の色を違えるということである。mi-parti によく似た色の使い方に motley と形容されるものもある。日本における片身替りの例は一部にすぎないが、西洋中世後期の mi-parti は可成り長く、また広い範囲に流行していると思われるし、この時代特有の興味深い装飾方法である。

mi-parti の早いものとして Norris の挙げる例は、十二世紀後半、英国の宮廷役人の儀式服で、コットという膝丈のワンピースの衣服に縦に mi-parti が表わされ、その片方は特に刺繡が施されており、更にその衣服の裾

は dagging になっている。また女性の衣服にみられる初期の例としては、Boehn が “Henry⁽⁵⁾ 二世の妻 kunigunde が赤い斑点と黄色い飾りのついた白い衣服をつけたこと” を述べ、また “中世ドイツの物語の中には赤と緑の mi-parti の衣服があらわれたし、当時の婦人達が mi-parti のモードを好んだ”⁽⁶⁾ と言っている。又、十二世紀末の聖エティエンヌの聖遺物画（ゲレ、市立美術館）の中央面には mi-parti のショースをつけた人物がみられる。

Ruppert によると、“mi-parti のモードが、衣服やショースにみられるのは 1300 年頃からで、これは十五世紀の終りまで長びいた”⁽⁷⁾ という。一方 Boehn は、“このモードの記録は明らかには出来ないが、その初まりはオットーの時代にさかのぼる” という。そして “中世を通じて衣服のおしゃれでは常に勝っていた男子の服装の中に初めに現われた。この奇妙なモードを考えたものは、おそらくおうむの華やかな羽毛を羨んだのであろう” と。mi-parti は男女両方に好まれて十六世紀後半まで続いたとしている。Boehn の言葉から察すると、mi-parti を単なる左右の色違いのみに限らず、motley、即ち雑色とか混色とかいう意味あいのものも広く含めているのではないかと思われる節がある。そうすればこのモードが十世紀後半から十一世紀前半の⁽⁸⁾ Ottos の時代から十六世紀にわたるという意見にもうなづける。

mi-parti の起りについては、明確な資料が見当たらないが、紋章との結びつきもその一つと考えられる。はじめ馬上試合に出場する騎士の身分や家柄を表わした楯の紋章が次第に騎士の衣服や家族の衣服にとり入れられ、それは装飾的な役割を果たすようになるのであるが、こうした紋章の用い方や、二つの紋章を組み合わせる合せ紋の如き方法が mi-parti の流行に拍車をかけたこと、両者の手法が密接な関係にあることは一般に言われているようである。

十三世紀の mi-parti の例としては、フランスの旧約聖書の挿絵中にみられるバイオリンをもつ演奏者のコット（又はコタルディ）が前中心から左右に縦分割の mi-parti になっている。“英国の鞍つくりのギルドのメンバー

は、1299年に赤と白の mi-parti のコットをつけて Edward I と Margaret of France の結婚の行列に参加した。⁽¹⁰⁾ mi-parti を用いた一種の揃いの服であろう。Peterborough 詩篇集⁽¹¹⁾には、金文字の周囲の装飾図に天使や騎士が描かれているが、その図の中の女の召使いのコットは緑と褐色の縦割り、の mi-parti、もう一人別の人物のコットは灰色と赤の mi-parti である。このような左右を色ちがいにするというようなことは、単に色調の多様の効果だけを目的としているのではなく、勿論そうしたことも計算には入れているであろうが、更に当時の感覚が不規則の中に美を求めていたのではないかととも考えられる。Duby が、十四世紀初期の芸術表現の近代化の流れの一つについて次のように述べている。⁽¹²⁾ “芸術家達は合理的な建築のおちついた mass に無用に装飾を加えて……、ステンドグラスの分割と記念像の美しい線から来たアラベスクを作りだすことによって、優雅な楽しい精神は、礼拝式の芸術のシンメトリーを侵し、まもなくきれぎれに破壊した。アラベスクは、神聖な礼拝式に次第にとって代った” と。

十四世紀に男子のコット類の丈が急に短くなり、ショースに包まれた長い脚を衆目にさらすこととなった。上衣が短くなったことに対しては、“防寒の意味をなさないし、丈が短かくなっても材質や作り方が贅沢になったので経済的な意味もないと非難されていた”⁽¹³⁾ というが、上衣類が短くなるとショースの大部分が見え、いきおいこの装飾にも眼が向けられよう。ショースはもともと右脚と左脚を別々に包み、腰のところで両者を結び合わせ、それを上衣に接ぐという構成であったところから、右と左をそれぞれ別の色の布でつくことは容易に思いつくことであろうし、あるいは反対に両方を同じ布で作る必要もなかったと考えてもよいかも知れない。十四世紀の英国の作家 Chaucer は、これを評して、“二色からなる彼等のホーズの包み布——白と赤、白と青、白と黒、黒と赤——は、着用者をして恰かも丹毒のようにし……”⁽¹⁴⁾ と厳しく批判していたと Planché が書いている。フランス大年代記の星騎士団の細密画⁽¹⁵⁾には、mi-parti のショースをつける騎士団員

がみえる。ある貴族は、“一層人目をひくために一方の脚を白か黄か緑の
一色とし、他方を黒か青か赤に装った。そして靴はちぐはぐの色のものをつけ
ていた”⁽¹⁷⁾。mi-parti のモードがショースから始まったとは言えないにしても、
資料の中では、ショースの mi-parti がかなり多いことに気がつくし、
またこのモードが十五世紀まで残っている例の多くは、特殊の衣服を除い
て、ショースのそれである。ということは、ショースにおいて mi-parti の
技法が非常に用いやすかったといえよう。

十四世紀半ばのフランスでは、一部で衣服の贅沢と誇張がまし、Ouiche-
rat の説明をかりると、⁽¹⁷⁾“金貨は主に衣服のために支払われ、手腕のある者
は誰でも贅沢に耽った。1365年の革命によって一時的に階級の区別が消えた
かに見え、パリの市民は王の命令の下に、紳士と等しく彼らの馬に金の拍車
を置き、金銀で飾ることを許させた。そのような習慣を禁止する法令は最早
なく、すべての門戸が彼らに解放された如く、彼らは富によって、立派な品
々を得ることができた”のである。そうした富は勿論衣服に及び、装飾の多
彩な傾向は、更に一層 mi-parti のモードを煽りたてたと思われる。それは
衣服の上では、殊にコタルディ (cottardie) の上に顕著にあらわれている。
コタルディは、十四世紀半ば頃からフランスとイタリアにあらわれたが、コ
ットの変り型で、cottardie 即ち cotte-hardie で、奇抜なコットという如
く、非常におしゃれな、当世風なモードを存分にとり入れた衣服で男女共に
用いられた。当時、紋章もこの衣服に非常によく用いられているし、mi-
parti の例も多い。コタルディには、屢々袖口、あるいは肘のあたりにチベ
ット (tippet) という一種の垂布を飾りとしてつけているが、このチベ
ットは当初は白い布であったのが、色物も用いられるようになり、それは一方が
白で、他方が赤とか青の如く、mi-parti の表現である。こうしたチベ
ットをつけるというところにもこの衣服のおしゃれ着としての感じがみられる。

⁽¹⁸⁾
“アレクサンダー物語”の宴会の場面では、テーブルにつく貴族達の一人
一人のコタルディが仲々変化に富んでいる。まだら色 (motley) あり、紋章

衣 (armorial) あり, mi-parti あり, またその上彼らのつけたシャブロン (chaperon) という中世特有の頭巾のケープの縁は鋸歯状飾りやスリットで飾られているというように、当時の流行が充分にとり入れられている。ここでいう motley とは、横縞, 斜縞, または衣服の一部が別布という如きもので、これらや紋章衣や mi-parti は、当時は同じような感覚からとり入れられたとみるべきであろう。また別の場面では、mi-parti のコタルディをつけた婦人達がみられる。このように変化にとんだコタルディをつけた例は、十四世紀ドイツの絵にみられる中世の生活を描いたところにもある。音楽学校の場面では、緑と紫の mi-parti, 緑と白の横縞, 赤と緑の斜縞, 紫と青の mi-parti, 桃色と白の mi-parti, 赤と紫の mi-parti などがみられる。

中世の細密画の中には、一般のシャブロンを變形誇張したような、例えば、左右の両端の角が横に突きでて、その先に鈴をつけ、大きなケープのついたシャブロンと、ショースという特有な服装の人々が妙な姿で踊っているものが描かれていることがある。そしてそのシャブロンやショースにも屢々 mi-parti がみられる。これは当時、道化師 (jongleurs, juglery) といわれるような人々で、“十二世紀以降、彼等は異様ないでたちと、目立つ調子の布によって人目をひいた。紅の絹の衣服と黄色い帽子のついた紅のマントとか、あるいは縦わりの mi-parti の衣裳をつけていた。人々はそれらを模倣し、説教者は彼等の服装の軽佻を非難した⁽²¹⁾”。“1346年、St. Denis の年代記の中で著者の修道僧は、シャブロンの縁の尖った裁ち方、片方づつ違った色のチベット、床まで達する袖やかぶりものを評して、まるで大道芸人のようである⁽²²⁾”⁽²³⁾と言っているが、彼等は時代のモードを極端に誇張していたのであろう。“中世の道化師達は、詩や音楽や踊りをよくし、あるいは、手品やレスリングやボクシング、動物の芸当などをする者もあった。多くは宮廷や地方の領主に抱えられていたが、下賤の者達はいわゆる大道芸人であり、彼らは多彩な色の衣服をつけ、上品さを犠牲にして笑いを起させていた。”⁽²⁴⁾ 娯楽の少い当時であって、この種の道化師たちは人気もあったと思われるし、

彼等の服装を一般人が模倣したのか、あるいは当時のモードを誇張して彼等が用いたか、何れにしても、両者が共に影響を与えあったことが考えられる。“十四世紀初めのフランドルの写本画⁽²⁵⁾にみられる踊り手の衣服は、十三世紀風のきっちりしたコットであるが、赤と白の mi-parti であり、樂士の一人は、青と淡黄褐色の mi-parti のコットと赤いホーズをつけていた。”⁽²⁶⁾十四世紀前半のフレスコ画“聖マルタンのナイト爵位授与”⁽²⁷⁾にみられる樂士は帽子も衣服も mi-parti で表わされている。これらは無地の mi-parti ではなく、片方が縞や模様になった美しい衣服である。シャブロン⁽²⁸⁾の mi-parti も芸人に限られず、一般市民にも用いられたようである。“1357 年パリ市民は紅と緑の mi-parti のシャブロンを採用し、これはパリ市長の手でフランス王太子にもかぶせられて、王太子を守った”⁽²⁸⁾という。

G. Chaucer は、カンタベリー物語⁽²⁹⁾の中で、カンタベリー巡礼の団体に加わった人々の人物や身なりを紹介しているが、そこには、騎士や修道僧や法律家、法王の赦罪状売り、村の牧師、商人、大工など、当時の種々の職業をもつ人が登場してくる。彼の描く服装も様々で、その人柄と相俟って仲々興味深いが、その中から mi-parti に関連すると思われるものを挙げてみる。

“自分の説を大げさに吹聴していつも金儲けの話をほのめかす一人の貿易商は、二またに分れたあごひげをはやして、まじり色の服をきていた。高々と馬に乗って、頭にはフランドルの海狸の毛皮の帽子をかぶっていた。彼の深靴は立派な締め金がついていた”⁽³⁰⁾。また“すばしこそうな法律家は学識と名声によってたくさんの給料と官職にありついた金儲けのうまい者であったが、絹の紐を帯にして、小さい飾りのついたまじり色の外套を着て質素なふうで馬にのっていた”⁽³¹⁾。

この二人の服装の中に“まじり色”という訳語が使われているが、これらは原文では、前者は in mottelee (in motley まだら色、まだら) であり、後者は a medlee cote (medley coat 混合した、よせ集めのコート) であ

る。⁽³²⁾大山氏は後者について特に“織り方または色彩の混合したもの、当時 sergent of the law の官服は brown と green のしみがあつた (Robinson)”と註釈している。そこで Canterbury Tales の現代英語訳をみると、前者を⁽³³⁾ motley dress とし、後者を parti-coloured coat と訳出している。これだけのことでどちらとも言えないようであるが、縞模様の如き混色や、mi-parti の如き分割した色調の衣服であることにまちがいはない。そして、このまじり色の衣服を着けている二人は、一方が当時経済力のあつた貿易商人であり、他方が身分の高い法律家であることから、他の人々とは異つた流行の身なりとして描かれたのではなからうか。当時、mi-parti のモードをとり入れられる階層は経済的なゆとりがあるか、あるいは特殊な場合に片寄つていたのかも知れない。

十五世紀末の“薔薇物語”の写本の歓楽の踊りの場面には、笛を吹く樂士とドラムをもつ樂士の衣服に mi-parti が使われている。前者は桃色と藤色の mi-parti の襟、黄金の房のついた桃色の垂袖、緑と黒の袖のついた黒い上着、mi-parti のホーズと靴であり、後者は、緑と藤色の mi-parti の襟のついた赤いコート、桃色のダブルレット、mi-parti のホーズであつたとい⁽³⁵⁾う。十五世紀イタリアの Carpaccio の聖ウルスラ物語では、ショースに⁽³⁶⁾mi-parti がみられるが、それは片方の脚の部分が二色に分割されて縞柄を表わしている。また同時代の別の作品の中にもこれに類したショースがみられる。そして何れも、プールポアン⁽³⁷⁾の袖には新しいイタリアモードであるスラッシュ(裁目)がみえる。中世以来の mi-parti と、ルネッサンスの新しいモードであるスラッシュが同時にみられた。こうして、ショースの mi-parti は、自由で華やかなルネッサンスモードととけ合つて暫らくの間続くようであるが、その傾向は極く一部に限られ、一般には余りみられなくなつた。特殊な例としては、例えば Tournament Roll にみられる Henry VIII⁽³⁸⁾の王子誕生の祝いに馬を曳く従者の衣服が黄と灰色の mi-parti であるが、ルネッサンス風の襟元からシュミーズがみえている。また1496年作の写本画

には、教区の射的場で数名の射手が何れも赤と青の mi-parti の衣服で描か
れている⁽³⁹⁾。また B. Gozzoli のフレスコ画“マギ公の旅立ち”には、mi-
parti の衣服とホーズが従者によって着用されている⁽⁴⁰⁾。

“mi-parti のモードは、従者や小姓、下僕に限られ、十六世紀半ば頃には
消えた”と Planché が述べているが、上述のいくつかの例から、それは mi-
parti のモードの末期の頃の現象ではないかと思われる。十五世紀には紋章
入りのコタルディもなくなり、衣服における紋章表現は、女子ではマント
に、男子では甲冑の上の袖なしのシュルコーや、軍装としてのプールポアン
の上に限られるようになった。そして mi-parti もまた、従者の揃いのお仕
着せとか、ショースの一部とか、あるいは道化師達の衣裳の中にわずかに余
命をとどめながら、しかしそれも時と共になくなり、次第にルネッサンス特
有のスラツウ (slash) の技法がこれに代って色彩の華やかさを表わしてゆ
くようになる。

最後に、御指導頂きましたお茶の水女子大学々長谷田関次先生に厚く御礼
申し上げます。また“カンタベリー物語”について御指示下さいました本学
の中田公子教授にもあわせて御礼申し上げます。

註

- (1) F. Boucher; Histoire du Costume P.188 (1965)
- (2) G. Duby; Foundation of A new Humanism P.11~12 (1966)
- (3) P. Lacroix; Manners, Customs, and Dress during the Middle Ages, and the Renaissance Period, P.541
- (4) H. Norris; Costume and Fashion, vol. II P.82 (1927)
- (5) 英国王ヘンリー二世 (1154~89)
- (6) M. v. Boehn; Die mode vol. I P.189
- (7) J. Ruppert; Le Custume vol. I P.40 (1947)
- (8) M. v. Boehn; 前掲書 P.174
- (9) ドイツ王 オットー一世~三世 (992~1002)
- (10) H. Norris; 前掲書 vol II P.166

- (11) East Anglia, Ms. 9961—62—F 74 (1299頃)
- (12) G. Duby; 前掲書 P.52
- (13) J. Ouicherat; Histoire du Costume en France P.230 (1877)
- (14) J. R. Planché; A Cyclopaedia of Costume vol. I P.302 (1876)
- (15) M. S. Français 2813 Folio 394 バリ国立図書館
- (16) J. Ouicherat; 前掲書 P.233
- (17) J. Ouicherat; 前掲書 P.230
- (18) Romance of Alexander, 英国 Oxford Bodleian (1338~44)
- (19) Maneessa Codex, Heindelberg 大学図書館 No.848
- (20) F. Boucher; 前掲書 P.188
- (21) おそらくシャブロン(Shablon)の尖端のリリピーブが長く垂れていることを指すのであろう。
- (22) P. Lacroix; 前掲書 P.541
- (23) P. Lacroix; 前掲書 P.224~228
- (24) British Museum M. S. (Stowe 17) Flemish 1300 頃
- (25) M. G. Houston; Medieval Costume in England and France P.96 (1930)
- (26) Simone Martini; Lower Church of San Francesco, Assisi, (1320~1392)
- (27) J. Ouicherat; 前掲書 P.232
- (28) Geoffrey Chaucer (1340 頃~1400)
The Canterbury Tales (1387~1392)
- (29) } 世界文学大系(筑摩書房)チャウサー P.8
- (30) }
- (31) }
- (32) 大山俊一註訳, カンタベリー物語(篠崎英米文学研究双書)
- (33) Nevill Coghill; The Canterbury Tales, A New Translation (The Penguin Classics)
- (34) Roman de la Rose, Carole of déduit (1440 頃)
Flemish, (British Museum, Harl, Ms 4425)
- (35) Dovenport; The Book of Costume. P.346 (1970)
- (36) Venice Academy of Fine Arts 1490—95
- (37) Collage of Arms. 1511. 2. 13.
- (38) } H. Shaw; Dress and Decorations of the Middle Ages vol. II (1843)
- (39) }
- (40) B. Gozzoli; The Journey of the Magi フローレンス Medici Riccardi Palace (1468)
- (41) J. R. Planché; 前掲書 vol. I P.302

以上